

《正岡子規(36)の続き》その274
子規周辺の人びと(二十四)

平岸 三八

漱石に

空に消ゆる鐸のひびきや春の塔

という佳句がある、明治42年(一九〇九)につくったもので、「空間を研究せる天然居士の肖像に題す 四月七日」の前書きがあるので、居士への追悼句であることがわかる。

大久保純一郎氏の探求によると、天然居士こと米山保三郎の兄なる人から、火災で弟の遺品などすべてを焼失してしまつたからとの頼みで、漱石が一高・大正時代の旧友米山の写真を複写して送つてやつた。その際に、添えた一句がこれである。

この大久保純一郎氏による探求とあるのは、半藤一利氏著『漱石俳句探偵帖』(角川選書 平成11年11月30日発行)からの孫引きである。

米山保三郎の兄は、米山熊次郎というらしい。漱石全集第三十五巻「補遺」の書簡の部に、熊次郎氏宛の書簡が二通載っている。

明治42年2月3日、牛込区早稲田南町

七より、芝区神谷町一八米山熊次郎へ

拜啓寒気烈敷候處御多祥奉賀候。偕原丁の御邸宅は、放火の為め御全焼の趣驚入候。其節天然居士の写真も御紛失につき小生手元にあるもの御複写の御考承知致候かねて頂戴致したる半身のもの一葉ある積にて種々尋ね候へども一向に見当らず、ただ小生と二人にて写したる分のみ残り居候右にても御間に合可申やと存じ別封にて差上候間御落手被下度候草々頓首

二月三日

夏目金之助

米山熊次郎様

これによると金沢の邸宅は、放火のため全焼し、天然居士の写真も失つたので、漱石の手元にあるものを複写して送つてほしいとの依頼があつたことが分る。

熊次郎氏の職業がなんであるのか、また金沢の家が全焼のため東京芝区に転住したものか、或は以前から東京住いなのかも不明である

この写真と共に「空に消ゆる鐸」の句を添えて送つたものである。

同42年5月28日、同番地漱石から、同番地米山熊次郎宛へ次の書簡が発せられている。

拜啓本日は遠路わざわざ御光来天然居士写真御丁寧に御届被下難有存候其節は菓子折一個頂戴是亦難有御礼申上候さて天然居士の肖像に題すといへる蕪

句中鐸とあるは宝鐸にて五重塔の軒端などにつるせる風鈴の積りに御座候。寂寞たる孤塔の高き上にて風鈴が独り鳴るに其音は仰ぐ間もなく空裏に消えて春淋しいといふ意味の積の處文字拙く御質問を受け汗顔の至に候右御返事傍御礼申上度候 草々頓首

五月二十八日 金之助

米山様

写真は長く記念として所蔵可致候

この書簡によると、熊次郎氏は天然居士の写真を他の友人の誰かのところで見付け(恐らく単独のものであろう。漱石と二人のものではないだろう)、それを複写して持参したものと思われる。

熊次郎氏が訪問のとき、漱石は不在で、面談が叶わなかつたのではなからうか。それでなければ鐸の字の説明や、句意をあらためて書簡で説く必要はなかつたと思われる。

届けられた写真が、漱石所持のものと異つたものであることは「長々記念として所蔵」とあることで明らかである。

米山保三郎は、生前に於て子規をして「四驚」せしめ、死後に於て漱石をして追悼の書簡を書かせ、更に追悼句をもものさせていて、長くその記憶の中に大才を残しているのであるが、僅に29才で死亡しているのに、大家の碑文の墓碑銘と大家の書家の書と篆額の墓を残しているのである。